新たな地域福祉教育副読本
作業部会委員のエピソード事例

社協職員の皆さん！
エピソードを募集します！

★これまでの作業部会で挙がったテーマ

「地域」「子育て」「新型コロナ」「災害」「里山」
「命」「ほっとするようなこと」「LGBTQ」「友達」
「思春期」「平和」「老い」…

新たな地域福祉教育副読本
作業部会委員のエピソード事例

事例提供者：渡邉麻由 氏（長泉町社協）

テーマ：「近くの他人」

私が小さい頃から祖母は介護が必要な状況でした。今思えば母はダブルケアの当事者だったことになります。

私は「ご近所付き合い」が苦手でした。高校生の時は、隣の家の人から「高校卒業後はどこに行くの？」と聞かれ、子どもが生まれて実家を離れて「男の子が生まれたんだね、今度は女の子がほしいね。」と一方的に心にどんどん入ってくるご近所がとても嫌でした。

結婚して実家を出て、次男を妊娠中に起きた東日本大震災。その後に起きた富士宮での地震発生時、私は2歳の長男と臨月の自分の身体を必死に守りました。外で工事現場の人が「こっちにおいで！」と公園から呼んでくれました。

落ち着いた頃、祖母が心配になり実家に電話をしました。祖母は糖尿病の網膜症で目が見えにくく、骨粗鬆症です。地震の際に逃げようと玄関で転びました。母は働いているため、祖母は一人でした。

「おばあちゃん、大丈夫？」電話の向こうの祖母は恐怖で泣いていました。

「一人でうんと怖かった。玄関の階段で転ばった。隣の〇〇さんがすぐ飛んで来てくれて助けてくれたよ。」

新たな地域福祉教育副読本
作業部会委員のエピソード事例

事例提供者：永井紀子 氏（浜松市社協）

テーマ：「地域」

小学校の交通見守りをしている高齢者。年々、地域の子どもが少なくなり、中学校については統合し廃校。

朝晩の登下校時に子どもたちのにぎやかな声、学校の校内放送が聞こえなくなり、町の活気が失われた。

そんな中、子どもたちのパワーをもらおうと、唯一ある地元小学校の交通見守りに手をあげ参加。

中学校がある時には、時にはうるさいなと感じていた若者の声も失われてみると「元気をもらっていたのだな」と感じ今関われる時間を大切にしている。

新たな地域福祉教育副読本
作業部会委員のエピソード事例

事例提供者：鈴木莉玖 氏（島田市社協）

テーマ：「コロナ」

新型コロナの影響により普段の生活が大きく変わりました。ニュースでは毎日のように感染者数が発表され、外出自粛の呼びかけがされ、暑い夏場でもマスクを着用するなど、誰も想像していなかった日々が今もまだ続いています。「旅行ができない」「家から出て行きたいところに行くことができない」「どこに行くにしても人の目が気になる」などマイナスことばかりがメディアなどで多く取り上げられています。ですが、私自身はプラスなことも多くあると思います。学校ではオンライン授業、会社ではオンライン会議など遠くの人と簡単に繋がることができるようになり、日本は大きく変化を迎えるチャンスのような気もします。

また、家族や友人の大切さが身にしみて感じることができました。コロナは人の命をたくさん奪い、世界中で大きな影響をあたえましたが、ある意味何かのメッセージであるように感じます。人は特別なことが毎日続けばそれはいつしか特別ではなくなります。学校に行けば友達がいる、職場に行けば仲間がいる、家に帰れば家族がいる。毎日続けばこれはあたり前になります。このあたり前なことが実は特別でとても幸せな事だと教えてくれているような気がします。

「大切なものはいつもそばにある」よくありがちな言葉かもしれませんが、失ってから気づくのではなく、失う前にもう一度自分にとって大切なことは何か振り返る、そんな時間がまさしく今ではないかと私は伝えたいです。

新たな地域福祉教育副読本
作業部会委員のエピソード事例

事例提供者：鈴木莉玖 氏（島田市社協）

テーマ：「命」

小学生から大学まで「バスケット」しかやってこなかった人間が23歳で結婚し、親になりました。

どんな時も支えてくれ一番近くで見守ってくれていた両親、自分と結婚をして2人の子どもを産んでくれた妻。そして、自分を父親として選んで産まれてきてくれた2人の子ども。「おめでとう」とお祝いの言葉をくれた友人。

両親への感謝の気持ちはもちろん、多くの人の支えがあり今の自分がいると強く感じることができ、人と人のつながりがとても重要だと改めて実感することができました。

新たな地域福祉教育副読本
作業部会委員のエピソード事例

事例提供者：二宮奈緒子 氏（HAHAHANO.LABO代表）

テーマ：「違っていることはおもしろいということ（子育て）」

人はそれぞれ違っているということ。
いろんな生き方、感じ方があるということ。

子育てを通じて・・・

自分の思う理想の幸せを息子に押し付けてもその通りには行かなかった。
息子の感じ方の違いを受け入れ、それを面白いと思えたときにはじめてその先が見えてきた。

違っていることに出会うたびに新しい発見があり、思ったこと以上に面白いことになっていく。

それは、一番身近な家族関係に始まったことなのだけど、広く、深く、社会や地域でも使えるものの見方であるような気がしている。

新たな地域福祉教育副読本
作業部会委員のエピソード事例

事例提供者：増田樹郎 氏（静岡福祉大学副学長・教授）

テーマ：「こころと多様性～自分さがし～」

中学生。

生きていることに心が定まらない葛藤に悩んでいます。

ある時、担任の教員から学校の近くにある重い知的障害児施設の見学をしようと提案がありました。そんな施設があることすら知りませんでした。

特にすることもない中で、ある週末、何人かの友だちと一緒に施設の正門を入ったところで、向こうから涎を垂らした小さな女の子がやってきました。彼の顔を見上げて、おもむろに口に頬張っていた十円玉くらいのあめ玉を手に取って、「あんちゃん、あげる」と差し出しました。ベトベトの小さな手とあめ玉が目の前にあります。周囲の眼を気にして、そのあめ玉を受け取り、食べるマネだけをしました。

手の中のあめ玉は、見学の間中、彼のこころをとらえていました。なぜ食べるマネをしたのか。あのときどうすればよかったのか。この後どうしたらよいのか。女の子の気持ちを偽った自分の心について考え続けました。

半日の見学が終わりかけたとき、彼の心のなかに小さな「光の粒」がキラリと生まれました。最後まであめ玉を食べることはできなかったけれど、でも女の子の「やさしさ」がなぜか自分の心を温めていることに気づきました。あらためてもう一度訪ねてにみようと思いました。同時に、自分を信じて、誰かのために生きていくこともいいかなと気づかせてくれました。